



Title	卷頭言
Author(s)	小倉, 正恒
Citation	懐徳. 1957, 28, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90307
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

卷 頭 言

理事長 小倉 正 恒

財団法人懷徳堂記念會が設立されたのは大正二年であるから、今年は四十四周年目に當るが、講堂を重建して定時の講義を開くに至つたのは大正五年であつて、その時から數へれば昨秋が恰度四十周年であつた。從來この大正五年から起算して、重建十周年、二十周年、二十五周年、三十周年等の式典を擧げ、時に應じて多少の記念事業も行つて來たのであるが、昭和二十年に戰災に遭つて講堂が燒亡してから、事情は一變した。即ち二十五年に新たに京阪の學界から九先生を迎へて事業運営委員に委嘱し、大阪大學文學部の協力を得て、時勢に適合した新しい企劃の下に事業を繼續することとなつた。爾來、恒倒の年祭を續ぐと共に、春秋二季の講座と堂友會誌の發行とをつづけて今日に至つてゐる。

既に講堂が燒失し、講義の形態も變化した今日、重建を記念する際の紀年を何時から起算するかについては、若干の問題があるのであつて、必ずしも燒亡した講堂の建立から數へる必要もあるまいが、しかし堂の事業はいついつまでも續けるべき性質のものであるから、一時の事情に基いて輕卒に更へるよりも、ゆつくり檢討することが望ましい。よく研究した上で次の五十周年頃までに紀年の基準を定めておけばよいであらう。しかしともかく今日まで四十餘年の歴史をもち、また新路線に入つてからでも既に數年の經驗を積んだのであるから、この邊で一度建堂の精神を回想し、また現状を反省して、兼ねて堂の健在を内外に紹介することは、決して無意義ではあるまい。堂友會がこの特輯號を編して四十周年記念に代へた所以はそこにある。

思ふに大正五年の講堂重建から、昭和二十年の焼失に至るまで、堂の展開した文化事業の成績は、既に世間に周知の事實であり、我等關係者としても幾多のなつかしい思ひ出をもつてゐる。我等はこのよき傳統を失墜せざらんことをこそ期するものであるが、しかし既に事情の變化した今日に於いては、戦災以前の堂の外形をもつた通り姿に復舊することが、必ずしも能事ではないであらう。何とならば、戦前に於いては、大阪の地に文學部をもつ大學は一つもなかつたのであつて、當然懷徳堂は、大學に代つて市民のこの方面の文化的要望に應へるべき責務を負うてゐた。ところが戦後は、阪大をはじめ二三の大學に文學部が設置され、この方面の學究的な事業は、これを大學に依託し得ることとなつた。従つて懷徳堂の今後の使命は、當然、ますます民間各層の文化的意慾を盛り上げてこれを反映しつつ、學問の府としての大學と緊密に提携し、そのよき協力の下に、眞に大阪人士による大阪人士の爲めのすぐれた文化事業を發展させることにあるであらう。既に阪大に於いては、よくこのことを理解され、懷徳堂と適塾とを以て大阪文化の二大源泉と認めて、そのすぐれた傳統の保存扶植に力をつくして居られるが、誠に我が意を得たものがある。私はこの上ながら民間各層の一層の御支持を希ふと共に、堂の關係者が今後一層事業の運営に善處して、市民の文化と阪大と堂との不離一體の發展を齎すことを希望してやまないものである。

終りに臨み、堂の事業の運営について多大の御盡力を賜はつてゐる九先生、並に終戦後の事業の繼續に御援助を惜まれなかつた十有餘の諸會社に對し深く御禮申し上げると共に、今井貫一君歿后、多年本會常務を擔任せられ、昨年十二月遂に物故せられた理事故木間瀨策三君の靈に對し、謹んで感謝と哀悼との意を表する次第である。